



写真-1 材木橋から兵庫運河および JR 和田岬線の和田旋回橋を撮影（平成26年5月）

■ 明治 32 年、わが国最大の運河が誕生

上の写真-1 は、材木橋から兵庫運河と JR 和田岬線の和田旋回橋を撮影したものです。旋回橋に「兵庫運河クルーズ」の屋形船が乗っているように見えますが乗っていません。屋形船の向こうには新住吉橋が見えます。

神田兵右衛門（こうだひょうえもん）の運河構想は、明治 8（1875）年の新川運河完成により一定の成果を上げますが、突出した和田岬の沖を通らず兵庫港に入港できる兵庫運河の建設については財源上の問題から断念していました。

その後、運河構想は林田村駒ヶ林の魚問屋主人・八尾善四郎※1らに引き継がれます。八尾らの主導により明治 26（1893）年 11 月に設立された兵庫運河株式会社によって、兵庫運河は明治 32（1899）年 12 月に完成し、新川運河と兵庫運河およびその支線を合わせた全長約 4km、水面積（≒18ha）ではわが国最大の運河が誕生しました。

これで、西からの船は和田岬沖を通ることなく兵庫港に安全に入港できるようになりました。

なお、明治 32（1899）年 12 月に架けられた和田旋回橋（橋長 15.5m）は、「日本初かつ最古の鉄道用（旋回式）可動橋であり、当初の架設地点に供用され続け現在も地元住民により積極的に活用されている貴重な土木遺産である」として、令和 3（2021）年度に土木学会選奨土木遺産に認定されています。

※1 八尾善四郎：弘化 2（1845）年兵庫県津名郡岩屋村（現・淡路市岩屋町）の長谷川八右衛門の次男として生まれる。5 歳のとき、兵庫西尻池の旧家・八尾家の養子となる。船頭から身を起こして魚問屋として成功を収め、和歌山や四国まで事業を拡大させた。明治 26（1893）年に兵庫運河株式会社を設立し、兵庫運河の開削・運営を主導する。八尾善四郎の国内貿易における成功と功績により八尾家は男爵に叙任され、神戸にて多くの事業を展開した。

■ 八尾善四郎、「兵庫運河会社」を設立

明治 22 (1889) 年八部 (やたべ) 郡林田村の地主であった八尾善四郎、池本文太郎 (林田村西尻池)、南佐兵衛 (林田村野田) らは、兵庫運河の開削を計画しますが、資金不足等により一旦は断念します。この後、八尾らは貴族院議員や資本家、大地主を請願者に迎え入れることで信用問題をクリアしようとします。

明治 26 (1893) 年 11 月、東京の大資本家・安田善次郎 (安田財閥の創設者)、飾東郡の旧姫路藩士・近藤薫、神戸の武井守正^{※2} (貴族院議員)、神戸市石井村の地主・谷勘兵衛^{※3}、西尻池町の藻川豊三郎 (林田村、東尻池村の地主、林田村村長など歴任) らの出資を得て資本金 35 万円で兵庫運河株式会社 (以下「運河会社」という) を設立します (もちろん八尾も出資している)。そして運河会社は、兵庫運河開削を求める請願書を兵庫県知事に提出します。



写真-2 兵庫運河 (御崎橋から北東方向を撮影)

請願書に添付された「兵庫運河計画書」「兵庫運河目論見書」には、和田岬沖は風波・潮流の関係から小型帆船が航行するには危険が伴い多くの船が沈没していたことから、船が兵庫港に安全に入港するために、林田村駒ヶ林から新川運河に至る本線と、東尻池から山陽鉄道兵庫停車場 (現・JR兵庫駅) までの支線の 2 本の運河を開削し、その分岐点に広大な船舶繋留所を設置する計画としています。また、運河の維持・管理費用を確保するため、運河を利用する船舶から通行料を徴収するとともに、開削によって生じる土砂で沿岸を埋立造成し、そこから賃貸料を得るとしています。

請願を受けた兵庫県知事・周布公平^{※4} (すけこうへい) は、運河開削による支障の有無を神戸市会および林田村会に諮問し、両者の了承決議を得て内務大臣に上申し、明治 27 (1894) 年 8 月 10 日認可が下りました。併せて、知事から運河会社に対して 24 ケ条の条件が付され、その中に工事費の 1/50 を保証金として県に納めること、開削工事竣工後 50 年間の通船料徴収の許可が記されています。

※2 武井守正：天保 13 (1842) 年生まれ。姫路藩士、政治家、実業家。好古堂 (藩校) に学び安政 4 (1857) 年専業主に抜擢され、京都で儒学を、大坂で国学を学ぶ。帰藩後勤王派に加盟、国事に奔走し捕らえられる。維新後出獄し新政府に出仕。白石県権知事、平県権令などを歴任、内務省・農商務省各局長などを経て明治 21 (1888) 年 10 月鳥取県知事となる。勤業政策を進め、離任に際し県民の留任運動が起きている。明治 24 (1891) 年 12 月、貴族院勅選議員に任ぜられ、大正 12 (1923) 年 7 月、枢密顧問官に転じた。明治 26 (1893) 年から実業界に転じ帝国海上保険、日本商業銀行などを創立し役員となった。大正 15 (1926) 年没。

※3 谷勘兵衛：当時の大庄屋で土木業の大手。徳川道 (神戸市灘区の御影公会堂近くを起点として、摩耶山に向けて登り、鈴蘭台、布施畑等を経て、明石の大蔵谷に至る長大な道) の建設工事を 2 ケ月で終わらせたことが記録されており、工事を請け負った谷の組織力のすごさが伺える。

※4 周布公平：第 11 代兵庫県知事。明治 24 (1891) 年 6 月 15 日に就任し、明治 30 (1897) 年 4 月 7 日に退任する。山口県萩市出身。

■ 一部の反対により用地買収は困難を極める

内務大臣の認可を得て兵庫運河の開削事業が始まります。ところが、8 割の用地買収を終えた明治 28 (1895) 年 3 月になって紛議が持ち上がります。運河とその周囲に 12 町歩の田畑を持つ東尻池の大地主・S 氏が反対を唱え (当初は計画に賛成していた)、運河が耕作地を分断する上、農業用井戸に塩水が混入するかも知れぬとのことで補償金を要求、計画は暗礁に乗り上げます。

それを聞いて買収済の地主が騒ぎ出し、「全村の激昂甚だしく」林田村会は反対する地主を「全村の公益を害するものとし、知事に説諭を請願するの決議」をします。知事や武井伊右衛門、村野山人 (元・神戸区長、衆議院議員) が調停に入りますが不調に終わります。

ちょうど県議選の時で、投票日の前夜、運河会社側の池本文太郎が地元の顔役を連れて立候補していた S 氏の実弟の選挙事務所に押しかけて強 (こわ) 談判に及びます。恐れをなした S 氏は翌日東京に逃げ、池本は選挙妨害で告訴され監獄入り。

こうした中、旧土地収用法 (明治 22 年制定) が適用されることになり、審査委員会は好条件の補償を認めたため、ようやく解決を見ます。ところが、日清戦争後の地価高騰もあって土地の買収価格はさらに跳ね上がってしまいました。

■ 八尾が私財をつぎ込んだ兵庫運河が遂に完成

運河会社は運河計画の一部を修正(運河の直線を曲線に、支線の幅員 10 間を 8 間に変更)して、明治 29 (1896) 年 1 月 30 日に待望の起工式が行われました。

池本はこの時「地価の値上がり」と株価の暴落で私財をすべて失い、選挙妨害したことで獄舎につながれた。しかし、今起工式を挙げる。運河は必ず国家に大きな利益を与えるだろう」と感激の辞を述べたそうです。

工事は、全体を 5 工区に分けて進められ、明治 32 (1899) 年 12 月に竣工しました。総工費は約 60 万 3 千円で、当初予定の 25 万円を大幅に上回る難工事となり、4 年近い期間を費やして兵庫運河(本線)1,035 間(≒1,882m)、支線 400 間(≒727m)、船溜は、本線が 18,930 坪(≒62,469 平米)、支線 600 坪(≒1,980 平米)、運河会社の所有地 10 万坪(≒330 千平米)となっています。運河開通早々、年間通過船舶は 10 万隻にのぼったといわれています。



図-1 (新川運河キャナルプロムナードの説明板の図を加工)

また、運河開削に伴って発生した土砂は、運河河口両側の埋め立てに利用しました。さらに、運河口より 100 間(≒182m)ばかり沖合に浅瀬があり、吃水の深い船が運河へ近づくのは危険なため、運河を開削した土砂で浅瀬を埋め立てて島(現在の荻藻島)を造成し、西南からの風波を防ぐことにします。

この計画は、明治 29 (1896) 年に認可され、明治 31 (1898) 年 4 月までに約 1 万 m²が埋め立てられました。さらに、荻藻島の東方への拡張が計画されます。この時、駒ヶ林浦漁業組合は、埋立によって浜地の潮流が変化することや、自然の細砂がなくなり魚類の生息環境が失われることなどを理由に反対しますが、埋立は認可され明治 33 (1900) 年 1 月に竣工しました。これらの埋立地は、沿岸貨物の陸揚げのため、あるいは宅地として活用されました。

この困難を極めた事業では、当初八尾に協力していた者も次々と去り、結局最後は、八尾ただ一人でこの事業に私財のほとんどをつぎ込み完成に到ったといわれています。



写真-3 兵庫運河開通(明治32年)
(新川運河説明板から引用)

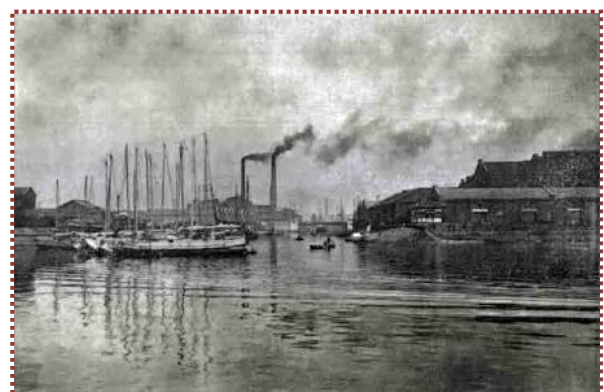


写真-4 明治末期(?)の兵庫港
(神戸市 HP「兵庫運河の今昔物語」から引用)

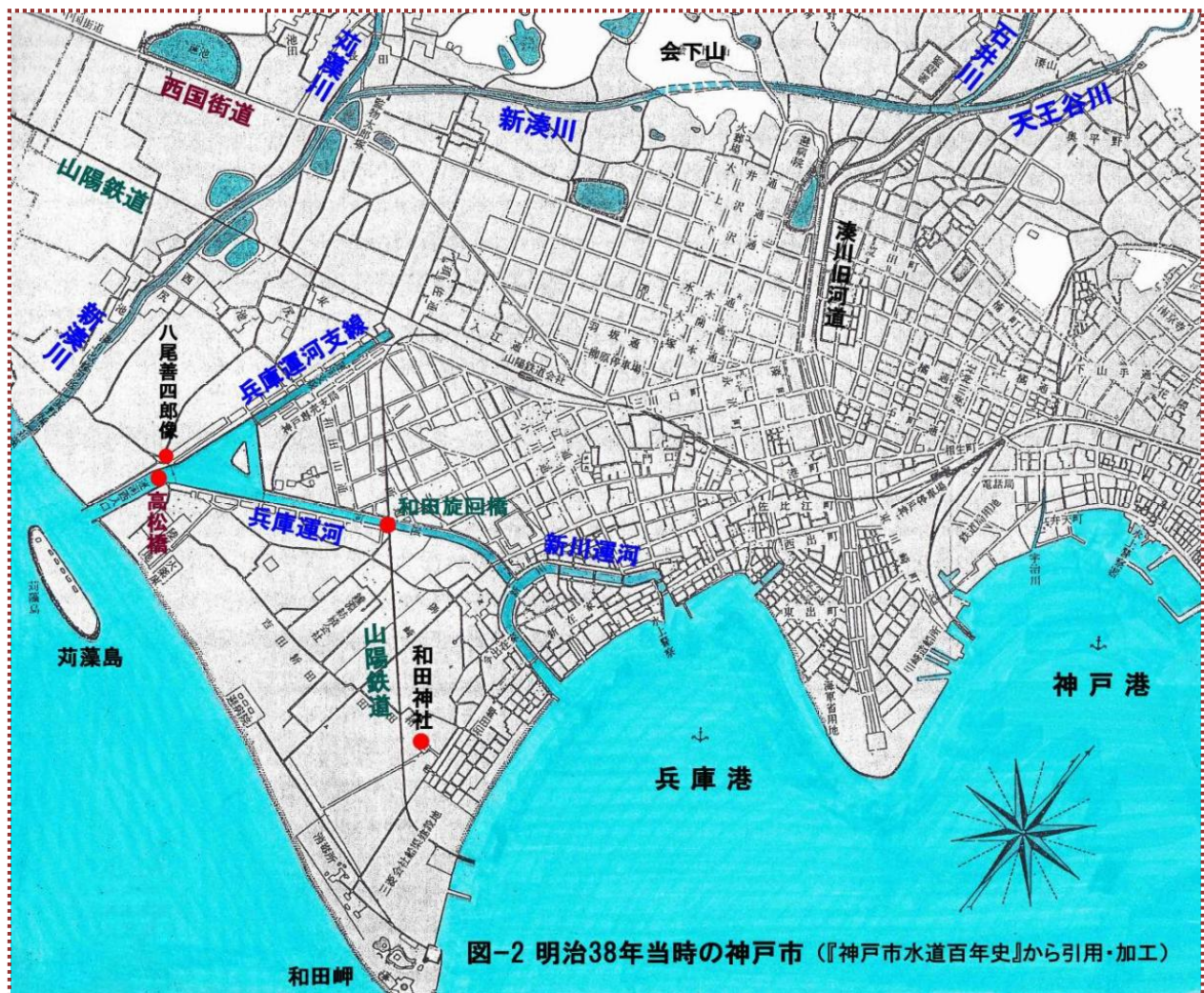
運河開通後の運河会社の管理運営も、請願者である武井や谷ではなく、八尾をはじめとする地主たちが実質的に経営を支えていました。八尾以外の大口株主の多くが、継続的に株を保有することなく早い段階で手放しています。請願者である武井ですら、明治 29 (1896) 年の時点で完全に株を手放しています。

■ 兵庫運河を神戸市に売却

やがて兵庫運河沿岸には工場や倉庫が建ち並びましたが、用地買収に多額の資金を要したことから、運河会社の経営はなかなか軌道に乗りません。運河入口付近における水深維持のための浚渫作業は運河会社の大きな負担となり、かといって通船料の値上げは沿岸の工場から反発を受けることから、やむなく八尾は私財を投げ出して会社の経営を続けていたといわれています。

そのような状況から、大正 7（1918）年、兵庫運河を神戸市に売却するという計画が持ち上がります。買収価格をめぐる交渉は難航しましたが、大正 8（1919）年、運河会社の財産や通船料徴収の権利を神戸市が 60 万円で買収することとなり、運河会社は同年 11 月に株主総会の議決を経て解散しました。

なお、運河会社は埋立地の一部を売却せず、埋立に伴う漁民への補償として兵庫県水産組合連合会に対して無償で使用させることとしています。



■ 八尾善四郎を顕彰し銅像を建立

神戸市による兵庫運河買収計画が進行する中、大正 7（1918）年八尾善四郎は死去します。その翌年、新川運河を開削した神田兵右衛門や初代神戸市長の鳴滝幸恭（ゆききよ）らが发起人となって、兵庫運河の玄関口に八尾の功績を称える銅像を建設することになりました。

この年の 4 月、運河会社は自らの所有地を建設地として「永久無限無償にて貸与する」ことを役員会で決議、銅像の建設費用 13 千円のうち、5 千円を発起人が負担し、残りの 8 千円を寄付金で賄うこととし、銅像の維持管理は八尾の遺族が担当することに。そして、大正 8（1919）年 10 月銅像が建立されました（写真-8）。

八尾の顕彰は兵庫運河の開削のみを功績として評価するものではなく、運河建設を通じて兵庫地域における工業発展の基礎を築いたことが評価されたものだそうです。

第二次世界大戦中に発令された金属類回収令（昭和 16 年 8 月公布）により、能福寺の兵庫大仏（写真-7）をはじめ多くの銅像が供出されましたが、八尾善四郎の銅像は、地元の人々の熱意と日露戦争で軍事物資の輸送に功績があったことから、その適用を免れたそうです。



写真-5 能福寺の兵庫大仏



写真-6 八尾善四郎の銅像

■ わが国初の鉄道可動橋～和田旋回橋

運河建設によって分断された地域をつなぐため、兵庫運河の本線には、可動橋が 5 橋、浮橋が 1 橋、支線には固定橋が 3 橋架設されたそうです。本線に架けられた 5 橋のうちの一つ、和田岬線※5 の和田旋回橋はわが国初の鉄道可動橋だそうです。

この橋は、明治 32（1899）年 12 月、兵庫運河建設に際し補償工事（費用は運河会社が負担）として山陽鉄道の手で完成させたものです。橋長 15.5m の上路式プレートガーダー形式の橋梁で、運河を利用する船舶が航行するために設けられたわが国の鉄道用としては数少ない旋回橋です。現在、回転機構はすべて撤去され固定されています。

因みに、八尾善四郎像の近くに架かる高松橋も、かつては可動橋でした。わが国には珍しい一葉式跳開橋と呼ばれる跳ね橋で、昭和 3（1928）年に竣工しています。この橋は、平成 6（1994）年に架け替えられ、跳開しなくなりました。



写真-7 旋回中の和田旋回橋（神戸市文書館所蔵）



写真-8 現在の和田旋回橋

※5 和田岬線：兵庫駅と和田岬駅とを結ぶ全長 2.7km の山陽本線の支線である。明治 23（1890）年、神戸～下関間の山陽鉄道（現・JR山陽本線）の建設用資材を、兵庫の港から各工事現場に輸送するために山陽鉄道の貨物支線として敷設された。兵庫駅 - 和田崎町駅（後の和田岬駅）間において長らく貨物輸送が行われ、兵庫臨港線も分岐していた。現在は、朝夕の通勤客を対象とした列車運行のみで、日中の列車運行はない。平成 13（2001）年 7 月に電化された。

■ モノローグ

兵庫運河は、神戸市域における工業の発展に大きく貢献してきましたが、時代の流れ、物流の変化等により、運河を取り巻く環境も大きく変わってきました。

今、わが国最大の水面積を有する兵庫運河周辺は、キャナルプロムナードが整備され、親水空間としての利活用が進められています。高松橋の畔から兵庫運河を見つめている八尾善四郎も、変わりゆく兵庫運河に驚いているのではないのでしょうか。

ムクゲ（木槿）の花

アオイ科フヨウ属の落葉低木。別名ハチスは本種の名である。和名は「むくげ」。「槿」一字でも「むくげ」と読むが、中国語の木槿（ムーチン もっきん）と書いて「むくげ」と読むことが多い。中国が原産で、日本へは古く渡来し、平安時代初期にはすでに植えられていたと考えられる。花期は夏から秋（7～10月）。枝先の葉の付け根に、白、ピンク色など様々な花色の美しい花をつける。ハイビスカスの仲間なので花形が似ている。花の大きさは径5～10cm。花は一日花で、朝開花して夕方にはしぼんでしまう。そのため、「槿花一日の栄」と例えられる。暑さで人や植物が元気のなくなる季節に次々と大きな花を咲かせる。



写真-9 大輪田橋近くの公園に咲いていたムクゲの花

【参考資料】

- 1 『新修神戸市史・歴史編Ⅳ 近代・現代』 神戸市 平成6年1月
- 2 『新修神戸市史・産業経済編Ⅳ 総論』 神戸市 平成26年3月
- 3 『近代土木遺産 兵庫運河』 神戸市兵庫区役所 平成23年3月
- 4 『近代神戸と兵庫運河～海港都市研究』 吉原大志 平成23年3月
- 5 『神戸開港百年』 読売新聞神戸支局編 昭和41年10月
- 6 『八尾善四郎、武井守正、ムクゲ』 フリー百科事典『ウィキペディア (Wikipedia)』

※発行：平成30（2018）年9月 『ひょうご水百景』 No.88

改訂：令和8（2026）年6月 『ひょうご水百景』 No.88